2026年３月29日（復活前主日、Ａ年）
メッセージ
「キリストは私たちのために死んだ」
（マタイによる福音書26:36〜27:66）

司祭ヨセフ太田信三

イエス・キリストの十字架への一週間、残酷な人間の姿が明らかにされます。自分の期待や既成概念に固執し、思考停止し、増幅する憎悪に支配されてしまう人間の姿、群衆の集団心理の恐ろしさ。責任逃れをする為政者の姿。そして、裏切ってしまう弟子たち。この人間がイエスを十字架上で殺すのです。ゴルゴタへの道のりは、このような人間の姿、闇が明らかにされていく歩みです。いよいよ一週間後に祝おうとしている復活日、私たちはこの人間の闇、罪深さを自らのうちに認めぬままに、まことに喜ぶことはできません。イエスを十字架につけた人々と私たちは同じ人間です。この一週間、私たちは自らを省み、ゴルゴタへの道のりに自らの存在を認めなければなりません。その中で、人間など、自分など誠にどうしようもない存在だと痛感することでしょう。しかし、そのどうしようもない自分のために、イエスは死んでくださいました。そして、神はそのイエスを復活させました。この物語に他人事でいては、この出来事に込められた神の愛を、救いをいただくことはできません。むしろイエスの十字架への道のりに自らの存在を認めるとき、私たちは百人隊長のように信仰告白に至る、まことの救い主との出会いに与ります。そしてその出会いのゆえにこそ、ご復活という神の救いの出来事を心から祝うことができるのです。

イエスは十字架上で痛み、苦しみ、孤独でした。それは今、この世界で苦しみや悲しみ、孤独の中にある命と共にあるためです。また、私たちが孤独や苦しみ、悲しみにあるとき共にいてくださるために。そしてイエスの十字架の姿は、私たちが苦しみや悲しみに無関心でいることを許しません。十字架を見つめるとき、そこに私たちの代わりにすべてを引き受けた方がおられます。十字架はファッションではありません。処刑道具です。なぜ神の子が残酷な処刑道具の上で死ななければならなかったのか、なぜまことの王がそこに自ら登ったのか。十字架は私たちに問いかけます。それらの問に直面することから、私たちの目は開かれていくのです。

この一週間、自らを省みつつ、十字架を見つめましょう。十字架上のイエスの沈黙のお姿ほど、私たちに語りかけるものはありません。その姿を見る時、私たちの奢りや偉くなろうとする心、闇に支配されてしまう、弱く、頑なな心が砕かれ、神の愛をいただく心が与えられます。イエスは十字架上で、両手を広げて自らの命をささげました。そしてイエスは今も、御手を広げて私たちを神との愛の交わりへと招いておられます。私たちも両手に抱えているものを手放し、両腕を開いてイエスのもとへ向かいましょう。イースターまであと一週間です。